

# 天ツ神族・国ツ神族と双分組織

三 品 彰 英

〔要約〕わが上古の伝承史料に見える天神・国神の区別は神々の分類範疇であると同時に、その子孫たる氏々に関する社会構造上の二分分類でもあつた。この種の分類はいわゆる双分組織の類型に属すると考えられる。双分組織なるものは原始社会・古代社会に広く見られる血縁的協同体で、社会構成上氏族と部族との中間に位置する集合単位である。この組織は結婚規制をはじめ宗教的社会的政治的軍事的の各方面にわたる各種の機能を持つものであるが、社会進歩に応じて色々な変異形態を示し、社会的政治的拡大成長に随つてやがて消失する。わが天神・国神の問題もかかる視角から解明せられるべき幾多の課題を含んでいるように思われる。

## 一、天ツ神と国ツ神

『古事記』『日本書紀』などの古典の語る神話伝説の中に天神国神という言葉が頻出する。例えば天孫ホノニギノミコト乃至はその後継者は天神の御子と呼ばれ、それに対して初めから地上にあつて天神の御子を迎える神、例えばサルタヒコノ神や、出雲のおホクニヌシノミコトなどは国神である。また国神の中で、ホノニギノミコトとコノハナノサクヤヒメとの成婚の段や、ヒコホホデミノミコトと

トヨタマヒメとの成婚の段では女神はヤマツミの女・ワタツミの女と呼ばれている。これまでの古典の註釈では、天神とは高天原系の神で、天孫及び天孫に随伴して降臨した神々を呼び、国神とはそれまでから地上にいた神々を呼ぶと説明されて居り、その限りではわれわれには異存はない。ところがそれに対する歴史的解釈が進められて来ると、それは民族系統を指すものと考えられ、高天原系民族(ヤマト民族)と国神系民族(その代表としての出雲系民族)なるものが想定せられ、従つてそれらの神話内容を原住民族

对新渡来民族、乃至は被征服民族对征服民族という歴史關係において説明しようとする努力した学者は決して一二に止まらなかつた。時には定説的な力をさえ持ち、今日でもなほ一部では行われている。そうした主張は筆者の年配の者には中学時代からなじまれて来た学説の一で、今改めて再説する必要もない。この種の神話伝説の解釈に対しては既に色々の批判や反論が試みられてもいるし、私もそれに賛成し得ない者の一人であるが、しからばそれをどの様に理解すればよいのであろうか。

神話伝説は特定の一歴史的事件よりも恒常的な文化的乃至社会的事象を語りつく傾向が強く、たとえ特定の歴史的な事件にしても、そうした恒常的文化事象に關係する限りにおいて神話の内容となり得る。従つて問題の天神・国神の二群に神々を分類する觀念が神話伝説に頻見することは、そうした区分觀念が社会的に語るに値する、乃至は語られなければならなかつた時代の社会現象を反映しているのである。また時には神話はそうした社会的現実の説明であり權威づけもあつた。しからば如何なる社会的現実が天神・国神の區別を必要としたのであろうか。神々の分類は

宗教的な謂わば原始神学の上で形成されたと考えられ、またそれは十分に確率のある想定でもある。だが古典に出て来る天神・国神の語は天神の子、或は国神の女・ヤマツミの女という形て出ている場合が多く、この場合の物語の内容からすれば、神としての天神・国神に直接關係しているのではなく、その神の子或は子孫の諸行動に關係しているのであり、その内でも成婚に關係する話が多いのである。すなわち神々に關する区分というよりも、神々の子孫に關する族系的分類概念としての方に重心が置かれている。政治的行動や特に成婚に際して各々の当事者が天神の子・国神の女という風に各自の系譜的出自を示す言葉の中に出て来る。こうした用例からすれば、天神・国神の分類はウジの出自に關する分類であり、恐らく記紀の神話が現実的な機能を持つていた時代には、数多いウジ族が天神系と国神系とに二大区分されており、それがしかるべき機能を持つていたであろうことを予想せしめるものである。それとともに天神・国神と呼ばれるものは超越的な神というよりも、祖靈乃至は祖神であつたのではなからうか、そして祖靈祖神でない神々が天神・国神と呼ばれている場合があつて

も、それは祖靈・祖神の分類概念に律せられた二次的な結果でなかつたかと推論し度い。それはとにかく、天神国神の問題は、歴史的には先ずウジの分類の問題として採上げて行くのが研究の順路となるのである。

わが古代のウジの系譜及びその分類を組織的に示しているものは『新撰姓氏録』である。勿論この書は平安初期の撰録にかかり、記紀神話の伝承時代のものではもとよりないが、現存文献としてはこれによる外はない。さてこの書はウジ分類の原則を序文の中で、

天神地祇之胄、謂之神別、天皇々子之派、謂之皇別、大漢三韓之族、謂之諸蕃、所以別同異序前後、是為三體也、

と説明し、皇別・神別・諸蕃の三体の分類規準をとつている。これは『新撰姓氏録』撰録当時の政治的社会的事情に立脚するもので、記紀伝承時代の伝統をそのままに継ぐものでは勿論ない。三体の内、諸蕃は大陸よりの帰化族であり、彼等がわが固有の民族社会の構成員であつた筈はないから、神話伝承のそれとの連絡を考える場合、埒外に置かるべきである。次に皇別は、大化以後、天皇の絶対政治の

確立した時代の天皇及び皇族を特別に扱う立場から立てられたものである。だが天皇権の絶対化の未熟な上古社会を考えるならば、天孫も天神の子と自称しているように、他のウジ人と同じく神別に入るべきである。したがつて上古社会のウジはすべて「天神地祇之胄」すなわち神別に納まるわけである。『新撰姓氏録』は上記の如く三体の別を立てながら、実際の姓氏登録に当つては、神別を天神・天孫と地祇とに再分し、また諸蕃は漢・百濟・新羅など国別に細分している。いうところの天孫とはアマテラス大神から日向三代のウガヤフキアエズノミコトまでの子孫を指し、総じて天神に属するものである。『新撰姓氏録』の三体の分類は新しく提案されたものであるが、その内に天神と地祇という伝統的な古い分類をも採用しているわけである。大陸からの多数帰化人の渡来、及びその経済的並びに政治的勢力、それから天皇の絶対権の確立という大化以後の新情勢に應ずるものとして、右の神別・皇別・諸蕃の分類は、充分にその歴史の意味を示している。思うに、上古のウジ構成の社会を変化させたものは、優勢帰化族の渡来と天皇政権の絶対化という二大新現象であり、書紀が允恭天

皇の御代に氏姓の問題の起つたことを伝えてゐるのも、右の二現象が萌芽的に現われ出した時代であつたからだと考へてよからう。氏姓の問題も当然時代の進展とともに新情勢に順応して行かねばならないが、本来姓氏家系は古い伝統の上に成り立つてゐるものであり、氏姓を云々する限り古い伝統への復帰の精神が強く動く。氏姓の調査はこの新旧勢力の矛盾の上に立たざるを得ない。「宝字之末、其争猶繁、仍聚名儒撰氏族志、抄案弗半、逢時有難、諸儒解体、輟而不興、」と『新撰姓氏録』がそのことの困難さを述懐してゐるのもその間の事情を報じてゐるに外ならない。

新しい三体の分類を立てながら、なお天神・地祇という旧い区分をその内に採用した所以もそこにある。勿論奈良時代や平安初期に姓氏家系を天神系・国神系に類別することを必要とするが如き現実的理由は考えられ難く、何人も当時の政治的或いは社会的史料からこの兩系分類の現実的意義を指摘することは不可能であらう。が、たとえ現実的意義がどうあらうと、家々にとつては家系伝承は大切に保存せられ、時には懐古の情切なるものさえあつたであらう。忌部氏によつて『古語拾遺』が、物部氏によつて『旧

事本紀』が私撰されたのも、この懐古精神の表出に過ぎないが、またそこに古い伝承資料の温存された場が見出されるのである。それとともに、この時代にまで天神系・国神系という系譜分類の觀念が強く残存してゐたことは、嘗てそれが社会構造の根底として根深く存し、かつ重要な機能を果してゐたことを示唆するものである。

古代にあつてはウジ家系の分類はまた祖靈・祖神の分類であり、かつは前神学的な神々の分類にもつながるものである。神祇令集解に、神祇を「謂、天神曰神、地神曰祇」と語釈し、またその具体例として、

「謂、天神者、伊勢・山城・鴨・住吉・出雲国造齋神等類是也、地祇者、大神・大倭・葛木鴨・出雲大汝神等類是也、……自大汝神以上、古記亦無別也、」

と説明してゐる。そしてこの解釈は古來法家者流の間においても別に異説がなかつたというから、諸人の認めた定説であつた。家は家系の絶えることもあり、また「万方庶民、陳高貴之枝葉、三韓蕃賓、称日本神胤」(『新撰姓氏録』)という式の詐称も行われ得るから、姓氏系譜にはその信賴性に欠ける節々も生ずるが、神社や祭神の系統に関し

ては、比較的安定性を保持し得るであろう。従つて右の神祇の具体的な類例は、それを祖神或いは守護神として奉祀するものとともに、天神系・国神系の社会的考察の好資料たり得るであろう。

神及びウジ系譜の天神・国神両系区別の研究は、神及びウジ人達の諸伝承を具体的に分析検討することによつて解明せらるべきであることはいうまでもないが、それよりも先に、この祖神及びウジ集団の二大区分という社会構造は、広く早期社会に見られる所謂双分組織(dual organization)なるものを想起せしめるが故に、焦点をそこに移す必要を覚える。わが上古のそれを直ちに所謂双分組織なりと簡単にきめてかかるのではないが、一応それとの比較研究を試みることは学問的に行わねばならぬ手續の一である。そして一般双分組織との類似及び相違が明瞭になれば、天神・国神両系区分が嘗て持つていたであろう諸特質とその意味の探求にも、色々と示唆を得ることが多いであろう。史料の甚だしく不十分な古代社会の研究には、そうした補助的研究のコースをたどらねばならない。論程はまことは迂遠である。だが、しばらく記紀などのわが古典史料から眼を

転じて、いうところの比較資料すなわち双分組織とは如何なるものかを考察しよう。

## 二、双分組織

家族、氏族(Clan)、村落、部族(Tribe)などは、その大小・性格・機能においてそれぞれ相違があるけれども、社会の構成単位をなす代表的な人間集団である。そのうち家族と村落は、一は血縁的に他は地縁的に結ばれた基本的集団で、且つ最も自然的に形成せられ、時処の如何を問わず存在する定形のものである。また部族は多くの家族・村落を結合し、且つ政治的性質を示す一層大きな集団であり、又自然的に形成されたもので、早期社会においてはこれも明確な存在である。それらに比べて氏族なるものは甚だしく趣が異なり、血縁的紐帯にもとづくというものの、家族とは原理を別にし、決して家族の拡大ではない。すなわち家族は父母双系を含む生物学的に、従つて最も自然な人間関係の上に成立しているが、氏族は父系或は母系の一方的な血縁関係のみをたどる片系的血縁関係の上に成立した、甚だ不自然な人為的結合である。従つて時間的にいつても

存在する時代があつたり、なかつたりし、また民族によつてその存否が一様でなく、その様相も機能も少からず差異性を示している。故に氏族なるものを固定的に把握するのは困難な節々が多く、動的に理解せらるべき社会制度であつて、その成立の理由、その基本的な形態と機能、全盛時の様相と崩壊状態、残存諸相などがそれぞれに検討せらるべきであるとともに、それに伴う歴史関係の諸問題が考察されねばならない。わが原始乃至古代前期の社会に關して、氏族制度とか親族協同体などの言葉が安易に使用されているが、その学問的な概念規定が甚だ不明瞭なために、結局論考そのものをも不明瞭ならしめているものが少なくない。ここにわが古代における氏族制度の問題を改めて正確に研究する必要があるのであるが、本稿では氏族問題の一部をなす双分 (dual division) に就いて論考し、最初に提示した天神・国神の問題に対する一般的な基礎問題を採り上げて見たい。

双分組織は氏族と共存するとともに、その性質と機能においても共通するものが多く、かつ両者は発生的に緊密な關係を持つものの如くである。早期社会研究の初期にお

てこの二つの組織が混同され、等しく氏族制度として採り上げられていたのは故なしとしないのである。双分組織とは、一部族を構成する氏族が二つの大きなグループにまとめられ、所謂半族 (moiety) なるものが形成され、それによつて部族が二分される構造をとることである。<sup>①</sup>この半族は小氏族のまとまりであり、その機能は氏族のそれと共通あるいは相補關係にあるところから大氏族と仮称されてもよいものである。この双分組織に關する一般的諸特質及びその歴史的諸關係を考える前に、具体的な実例を二三の種族について略述して置こう。

#### 一、イロクオイ族の半族<sup>②</sup>

イロクオイ連盟を形成している六個の各部族 (tribe) は、その内部に、多いものは八つの、少いもので三つの母系氏族 (clan) を含んでおり、その氏族名の殆んどは各部族に共通している。因みに氏族は族外婚的集團である。そしてこの部族内の氏族は二つのグループにまとめられて半族を構成している。例えばセネカ (Senecas) 部族では次の如く双分されている。

第一半族。熊、狼、海狸、海亀の四氏族。

第二半族。鹿、鶴、鷲、鷹の四氏族。

一つの半族に属する氏族は互に兄弟氏族と呼び合い、他の半族に属するものを従兄弟氏族と呼んでいた。半族はもと族外婚集団であつたらしいが、早くこの規制はなくなつて、氏族のみが族外婚的規制の単位となつてゐるに過ぎない。半族の現実的な機能は一面社会的であり、一面宗教的である、すなわち對抗競技、葬式、部族会議、イチゴ舞踏・青トモロコシ舞踏の場合に各半族は常に対抗的立場に立つてそれを実修し競争する。そのうち競技が最も一般的なもので、それは部族会議や連盟会議の際に行われるものであつた。このような双分組織は、社会構成の面の外にも、宗教講社や呪師組合の組織と機能の上にも行き亘つていた。この点、モルガンは、「セネカ種族は今では彼等は呪師集會を失つてゐるが、嘗ては彼等の宗教制度の重要な一部分をなしてゐた。その集會を開くのは、彼等が最高の宗教的儀式を守り、且つその最高の宗教的密儀を行うためであつた。彼等は各半族毎に一つづつこの組織を有したもので、これは半族と宗教儀礼との自然的な関連を立証するも

のである」と、曾つてその持つていた宗教的機能を重視してゐる。

## 二、ウィネバゴ族の半族<sup>③</sup>

ウィネバゴ族 (Winnebago) は北米ミシガン湖の東方の深い森林地帯に住居する種族で、その経済生活及び物的文化は甚だしく単純である。彼等の社会構造は双分組織の演ずる役割をもつて特色づけられ、またその祭政機能も氏族半族との連繫によつて演ぜられてゐる。

彼等の社会は半族に双分せられ、その一半は *Wangeregi* すなわち「天に居るもの達」と呼ばれ、他の一半は *Manegi* すなわち「地に居るもの達」と呼ばれ、まさしく天ッ族及び国ッ族の二集団から構成されている。この名前は所屬氏族の名の由来する動物に関するもので、*Wangeregi* は広く鳥類にも呼ばれ、*Manegi* は地上及び水中の動物をも包含する言葉である。彼らにとつてそうした動物は主要な守護神靈で、P・ラディン (P. Radin) に従えば “at the present time conceived as an immaterial being in control of an animal species.” である。動物とついても現在のもの

のをいうのではなく、神話時代の動物で人態をも動物形相をもとり得る靈的な存在であり、この聖動物との関係において氏族なるものが成立しているのである。換言すれば聖動物を通じた“those-who-are-relatives-to-one-anothers;”である。謂わば *Mungji* は我が古語のワグツミ・ヤマツミの觀念を含むものであり、その名を負う半族はワグツミ族・ヤマツミ族と邦訳することも出来よう。さて各半族に所屬する諸氏族は次の様である。

天ツ族 雷鳥、鷹、鷲、鳩の四氏族。

国ツ族 熊、狼、野牛、水靈、鹿、大鹿、蛇、魚の八氏族。

因みにいふに、彼等の氏族は父系をたどつて教えられている。さてこの半族集団の本来的な機能は結婚を規制することとて、天ツ族のものは国ツ族のものと結婚するという外婚半族である。そして氏族の族外婚は半族のそれから来る二次的の結果に過ぎない。半族の持つ機能については、この結婚規制の外に、なお次の如き諸点が注意される。すなわち、(イ) 部落の組織において、(ロ) 戦時の氏族編成において、(ハ) 部族酋長に対する祝宴の際の氏族の配置の基礎

として、(ニ) 祭礼に行われるラクロックス・ゲーム (*Laksose Game*, 一種の球戯) の組合せの規準として、それぞれに半族は対立的にその機能を發揮する。

まず部落の住居プランの上に半族の在り方が具体的に示されていた。すなわち古老達の語るところでは、部落地区は東南から西北にかけて想定的に引かれる分界線によつて上部と下部に両分され、上部は天ツ族の、また下部は国ツ族の居住区に配当されていた。十二氏族の内でも優位を占めているのは雷鳥氏族で、部族酋長 (*tribal chief*) はその内から選ばれる。そしてこの雷鳥族の酋長の公舎は一般民家とは外見を異にし、且つ上部地区の一定地点に建てられ、一方下部地区には熊氏族の酋長の公舎が同様に建てられ、両半族が両者に分屬している。その他鷹氏族と野牛氏族も公舎を特定位置に所有している。

双方の基礎觀念はそれぞれの所屬氏族の持つ政治的機能を通じて具体的に理解することが出来る。部族酋長であると同時に雷鳥氏族の長である彼は「平和」に関する諸々の機能を持ち、部落生活の安寧の確保をその使命としている。彼は戦争部隊を引率せず、寧ろ公認されない戦争や不利な

戦争を防止することに努める。その方法は彼の神聖なパイプを進軍の途上に置くと、軍隊はそれを超えることが出来ない。また彼の公舎はアジール (asylum) となり、犯罪者がそこに遁げ込むと犯人は保護せられる。或いは彼は犯行者とその復讐者の間に立つて然るべき仲介をつとめる。要するに「平和」とは単に戦争に対するばかりでなく、広く部落民の生存の保護に亘るもので、ひなとりを育ぐむ親鳥として象徴せられている。

雷鳥氏族の酋長と対照的なものは國ツ族の熊氏族の酋長で、上述のようにその公舎は反対側の下部に立てられて居り、その職能は雷鳥氏族のそれと匹敵するだけの重要さを持つている。彼は戦争に出陣するとともに、「戦い」に關係するあらゆる事柄に特権を持ち、且その特権を示す奇妙な形の棒を所持し、必要な時にはそれで違反者をむち打つのである。部落の安寧を乱すものを罰し、敵や病氣から部落を守護する。すなわち警察酋長で、毎夜部落を巡回し内外からの脅威をなからしめるように努める。謂わば非常時態に対処する酋長である。熊氏族のそうした職能は、彼等と交友關係にある狼氏族 || 兵卒氏族によつて助けられる。

以上の外の各民族もそれぞれの職能を持ち、例えば鷹氏族は戦士 || 士官として、野牛氏族は伝令係として、また水靈氏族は水路の世話役としてという風である。なおウイネバゴのすべての氏族は、各部落に分散して居住しているから、どの部落に於いても氏族及び半族による上述の如き組織とその運営とが可能なわけである。

### 三、インカ帝国の半族<sup>①</sup>

新大陸の原住民の中で最も強大な祭政国家を建設したインカ帝国 (Inca Empire) において、原始的社會組織に属する民族特に半族を見出し得るであろうか。若し見出し得るとすれば、それはどのような形で存続しているか、少くとも、可なりの進度に達した統一国家における半族の在り方という点に関心をもつて、ペルーの民族社會を考察して見たい。アンデス地方の民族の間には基本的な社會集團として *ayllu* なるものが知られている。これは血縁集團であつて、今日の民族學的な意味での氏族に該当し、各 *ayllu* は伝承的祖先・植物・動物・自然現象・住地などからその名を採り、嘗ては族外婚的 (氏族) であつた。勿論今日で

も他の諸特徴は認められるが、この族外婚規制はあまり守られなくなっている。

しからばここに問題の双分組織はどうであろうか。インカの帝都クスコ (Cuzco) の創建伝承として次の如き話が伝えられている。

「かくて彼 (Manco Capac, すなわちインカの建国者)

はこの帝国の都城の建設にとりかかり、それを二つに分制し、それを Hanan Cuzco 及び Hurin Cuzco と呼んだ。前者は上クスコ、後者は下クスコを意味している。

皇帝に従った人達は上クスコに居住することを欲し、そうした理由から Hanan Cuzco の名が出たのであつた。そして皇后によつて集められた人達は下クスコに住居し、従つてそうした町名が呼ばれることになつた。」

この伝承を率爾に読むならば、色々な解釈が成立し得るであろう。これまで論者の多くは次のように解釈している。「この上下両区分は彼等がそれぞれこの地にやつて来た時の居住した位置に由来する。すなわち下クスコの人達が最初に来て、この谷の豊饒な地区である下部を占居したが、後から来着した上クスコの人達は好適な所が既に先着

者に占居されていたので、上部の有望でない地区に住居するより外はなかつたのである。」こうした解釈は伝説を史実に直訳する合理的解釈であるが、這般の行き方が伝承の語る実相を必ずしも解明するものでないことはその例に乏しくない。半族制をもつ早期社会の部落の居住地区が双分組織に従つて、上下或は左右などの両地区に区分されている事実を熟知しているものにとつては、上掲の伝説は寧ろそうした社会的文化現象に由来するものであると理解せざるを得ないのである。オルソン (R. I. Olson)<sup>⑤</sup> が、それを双分組織を語る伝承と考へ、それに連関する社会文化資料を蒐集していることは妥当な見解である。クスコの西方にある三十の部族連盟の地方をチャンカス (Chancas) と土人達は呼んで居り、そこでは二人の戦争酋長 (Sinchis) がそれぞれ各自の集団を結成している。この二人は兄弟で、兄の集団は Hanan - Chancas すなわち上チャンカスと呼んで優位を占め、弟酋長の集団を Hurin - Chancas すなわち下チャンカスと呼んでいる。彼等は嘗てインカに対して戦争をいどんだが、その集団は二人の戦争酋長に率いられた双分集団に外ならなかつた。この部族ばかりでな

く、双分組織はインカ全領域を通じて見られるところであり、十六世紀に採訪された文献には次の如く報ぜられてゐる。

各地域には二つの区 (*parcialidades*) があり、*anansya* 及び *urinsaya* と呼ばれてゐる。この各区に一人の酋長があつて、区内の小酋長達を統轄し、且つ *anansya* の酋長が優位を占め、両区全体の最高支配者でもあつた。祭礼の時には *anansya* の人達は右側に座をとり、*urinsaya* のものは下位の左座に席をとる。半族区の各酋長は八つの氏族 (*ayllus*) の首領で、各氏族にも小酋長があつて、それぞれ定まつた席次があり、*anansya* 氏族の小酋長は右座で首領酋長の背後に居列ぶ。*urin-saya* のものは同様に左座にならぶ。(三品註、*saya* は半族所屬の地区を意味しているようである。)

次にインカ帝国における這般の双分組織は如何なる機能を示していたであろうか。インカ支配の時代には、双分組織は表面的には政治的な地域区分として打出されているが、這般の区分がインカ以前から伝承された社会組織であつた

ところからすれば、その本来的な機能は、行政的であるよりも寧ろ社会的宗教的な点において探求されねばならぬ。その点で先ず祭儀実修における双分組織の關係事項が注意を引く。八月或いは九月に首都クスコで行われる *sina* の祭礼には、ウカバタの広場の祭壇に祖先(氏族の?)の大神たちが奉安せられ、祭儀実修者達(王族・貴族及び庶民)は半族關係に基づいて二集団に分かれ、広場の両側に相對して席につく。こうした祭礼習俗はインカの他の地域にも見られ、例えばチアウアナコ (*Tiahuanaco*) 及び *Aran-saya* (*Hanan division* に該當) 及び *Ma-Saya* (*Hurin division* に該當) の両半族は広場の各自の側で踊り、万一他方の区域を犯すような時には血を見る争いとなる。なおここで注意して置き度いことは、彼らがキリスト教を受容の後、この双分構成はキリスト教教会内に見られるという点で、新しい文化状況の下での順応現象を語るものといえよう。オルソンの实地採訪した山間の部落では、今日なお植付・收穫その他の祭礼に同様な双分の半族集團の對立關係と実修様式が見られるという。思うにこのような双分組織の宗儀的機能は古い伝統に由来するとも

に、最も後代まで残存する要素である。

双分組織と族外婚制との関係はここではどうであろうか。オルソンは「*Siuna* は外婚的であつたと推定される。

が半族も外婚単位であつたかも知れぬ。」と甚だ漠然たる言い方をし、若干の傍証資料を掲出してゐる。その想定は間違つていないかも知れないが、いずれにしても族外婚規制は双分組織の機能の内でも早く不明瞭になり、或は消滅してしまふことを思わしめるものである。

前述のインカの両半族がその一を皇帝に、他を皇后に属するものと伝承されて居り、またマンコ・カバクの教えとして、「*Hanan Cuzco* が *Hurin Cuzco* に優位すること、而してそれは前者が男によつて、後者が女によつて伴われて来たことによる」と伝えてゐる。すなわち両者は男女の原理に即する集団であり、そこにも両者間の婚姻関係が暗示されているように思われる。このことはエクワドルのカングアリス部族 (*Caranis*) の創世洪水神話との比較からも示唆を受ける。その話の筋は次のようである。

洪水の終つた後に……女達とカンゲアリス兄弟との間に親しみが出来、兄は女達の一人と結婚した。ところ

が兄が潮水に溺れたので、生き残つた弟のカングアリスが一人の女と結婚して、他の女を妾とした。かくして十人の息が生まれ、その五人づつて二つの血縁団を形成し(その内一方の集団は女系に属してゐた)、一を *Hanansya* 他を *Hurinsya* と呼んだ。現存するカンゲアリス人のすべては彼等の子孫である。

少くともわれわれはインカをはじめ北アンデス地方の双分半族が上・下の関係と同時に、また男性原理と女性原理とに観念づけられていたことを推知することが出来る。

以上新大陸における三種族の間に行われていた双分組織についてその具体例を概観し、該社会組織の構造と機能の一斑を理解しようと試みた。双分組織は勿論新大陸に限るものではないが、実例をここに求めたのは、この組織が新大陸の諸民族の間に最も標式的な形で行われていること、及び調査報告が多いという資料的理由にもとづいたに過ぎない。私の関心は寧ろ旧大陸の文明民族の古代社会における這般の協団体組織にかけられてゐるのであるが、しかもそのためその標式的な形態を探求するの必要を感じたのであ

つた。双分組織については早くから特に婚姻習俗の研究に連関して諸学者の注意したところであり、例えばマクレナン McLenan やその当時の論者はその好例である。またリヴァース Rivers は、後にその行き過ぎを論難されたが、双分組織の社会区分的意義を強調したのであつた。が、この組織に関して世人の注意を引いたのは H・L・モルガンの『古代社会』であり、今日なおその学説に一辺倒の帰依を捧げている学者?も少くはない。

双分組織に言及する論者は甚だ多いが、それを根本的に追求してその一般的な特質を歴史的並びに機能的に解明した論者は、私の不学の故であろうが、甚だ稀である。モルガンのイロクォイ族の調査と論究は甚だ興味深いものであるが、双分組織の一般的な特質の解明という点になると、その採択されたのがイロクォイという一特定種族であり、かつ彼等の該組織は必ずしも基本的な形態を保持していたとはいえない点で、この名著もわれわれに満足を与えないのである。筆者の全くの管見に過ぎないが、この問題に關心を示し、比較的詳しくその一般的な問題に論及しているのはカリホルニヤ大学の R・ローウィ教授で、その旧著

『原始社会』<sup>⑥</sup>及び新著『社会組織』<sup>⑦</sup>などの著述にそれを論じている。同教授は筆者には恩師であり、師は常に論断を下すに甚だしく慎重な学者である。双分組織の如き難解なテーマに関しては特にそうである。ローウィはこの問題を、族外婚制との関係及び氏族との関係において、特にその成立過程を中心に論考している。双分組織が族外婚と緊密な関係にあり、嘗てそれが族外婚集団と考えられたのもその故である。しかし時には結婚とは無関係な (agnans) 事例もあり、双分制と族外婚とは必ずしも本質的な関係を持つものではなく、二次的な結合とも考え得ることを推論している。次に氏族と双分半族との発生的関係については、同教授は (イ) 一半族が数個の支族を分出し、それが血縁感を持ち続けたのかも知れないし、(ロ) 多数の氏族が二大集団<sup>フクトリ</sup>に結集したのかも知れないし、(ハ) 数個の氏族の中の若干が絶滅して二つだけが残存したのかもしれないし、(ニ) 半族と氏族とは別々に生じ、後になつて双分の組織に結集したのかも知れない。という四ヶ条の抽象的な可能性を掲げ、その何れもが歴史的に実証され得ることを実際のデータによつて論考し、かくてその起原につい

て、「上述の考察は、世界中の二分組織の起原が複数的であることを支持して呉れる。勿論這般の組織内の或る特質が互に借用され、広範囲に伝播したことは疑を容れないところであるが、しかしこの特質の伝播借用は該組織の構造的基本体の伝播なくしても起り得るのである。」と述べ、「半族組織なるものは深遠な六ヶしい創造ではなく、自然に又或る場合には人口学的諸条件からも不可避的に生ずる組織の一形態である。……族外婚の半族のみについて考察してもその起原が一樣でないことは明らかである。要するに二分組織は文化の輻合現象なることが例証せられるであろう。」と論結してゐる。

次に私の知り得た最も詳細な研究としては、カリホルニヤ大学のR・L・オルソンの「アメリカ原住民における氏族と半族」なる論文である。この研究は地域的には新大陸に限られているが、その間六十六の種族に亘る半族の事例を掲げ、この多数なる例を通じて氏族集団の持つ結婚規制及び、民事的軍事的祭儀的権能の交替制などの機能を描き出すとともに、その比較によつて新大陸における氏族及び半族が歴史的共通の起因に出づることを推測せざるを得ない

と述べている。それとともに同氏の関心点は半族区分の基礎觀念に向けられて居り、鳥類対獸類、夏対冬、平和対戦争、白対赤、天族対地族、酋長対戰士などの対立範疇に配当されていることに留意し、就中、天対地（上対下、鳥類対獸類を含む）の觀念が絶対多数に及んでいることから結論的に次の如く論じている。

半族組織に最も顯著なるものは、天対地（或は上対下・鳥類対獸類・高対低に關する）の觀念である。それは西北アメリカ・平原—森林—東南地帯及び西南カリホルニヤ境域を掩うている二分組織の基礎觀念をなすとともに、メキシコ・ギアナ地方にも見られ、またアンデス地域（但しチブチャ族を除く）の半族組織の基礎ともなつてゐる。かつまたそれは広く男性対女性の半族關係とも結合してゐる。アメリカ土民社会に最も広く行きわたつてゐる宇宙觀の一つは地母と天父のそれであり、私は天対地・男性対女性の二分集団の關係はこの天父・地母の觀念と歴史的に結合してゐるとの見解に強く傾いてゐる。」

と論じ、這般の社会習俗が、物質文化における新大陸と旧

大陸との関係と同様に、旧大陸の双分組織と原古文化的に歴史關係を持つことを推定し、シベリア諸民族の間に父系氏族と双分組織が広く行われていること、また古代シナにおける該習俗の存在したことなどをはじめ、旧大陸における双分組織への瞥見をもつて論程を結んでいる。

以上ローウイ及びオルソンの論考を参照したが、両者の論は必ずしも一致していない。この習俗の發生に關して、後者は全面的に伝播關係を強く考えようとするに對して、前者はそうした伝播關係を部分的に承認しつつも總括的には輻合説を提示しているのである。私は両者の立論の相違について論ずべき問題の若干を用意しているが、それはわれわれと關係深い東洋諸民族の間における双分組織の実証と分析を経た後に試みるのが順序であろうから、ここでは将来の課題として置く。が本稿における一応のしめくりとして次の諸点を指摘して、わが上古の双分組織の検討の参考として度い。

私は双分組織の事例として、さきにウイネバコ族・イロクォイ族・インカ帝国の三者を引例した。このうちウイネ

バコ族は後進的な社会組織を保持している民族であり、イロクォイ族は部族連合による民主的政治体制を發達させた民族であり、またインカは新大陸における最大の帝國を建設した珍しい民族である。このように社会的政治的に進度及び性格の異なる民族の間にあつて、双分組織が如何なる形態と機能において存在するかを示し、該習俗の變異的側面を見ようと試みたのであつた。最も社会進度のおくれているウイネバコ族の間においては、双分組織は最も広範な機能を示しており、これを類別すると次の如くである。

(イ) 結婚規制——族外婚の基本単位

(ロ) 宗教的側面——祭礼その他の行事における對立的集團單位

(ハ) 行政的並びに軍事的單位

これと比較してイロクォイ族にあつては宗教的機能のみは存するが、他の二者は認められない。インカ帝國及びその領内においては族外婚の機能は明らかでない。ただ嘗てそれが行われていた痕跡が追求されているに過ぎない。それが妥当な推測であるとすれば、そこでは嘗つて存在したがいんか時代には既に消滅していたことになる。これらのこ

とから双分組織の機能の中で族外婚規制は政治的社会的進  
度に従つて消滅する可能性の最も多いものであると考へて  
大過ないであろう。それに対して、宗教的機能はイロクオ  
イ族にも、又インカを含めたアンデス種族の間にも盛行し  
て居り、それは最も後まで残存する機能である。行政的軍  
事的な機能については、イロクオイ連合の行政上には  
殆んど關係を示していないが、インカ帝国内では、帝国の  
新しい行政区劃として姿容しつつも存在している。がイン  
カの如き強大な帝国支配の発達は、も早や双分組織の如き  
旧い社会組織を表面的に旧態のままには存在せしめていな  
い。かつて存在した名残りが発見せられるに過ぎないとも  
いえる。

右の諸機能の外に注意される一事は、イロクオイ族にお  
いて双分要素は宗教講社や呪師組合の基本構造となつて居  
り、特にアンデス地方のエイマラ族 (Aymara) の間でキリ  
スト教会内の区分となつてゐることはまことに興味深い。  
この外呪師組合や祭礼団の内に双分組織を持ちつつづけてい  
る好例は北米の南西地方のプエブロ族 (Pueblo) の間に  
見られる。このように双分組織の宗教機能が社会の全面的

關係から退いて、特定の講社やキリスト教教会内に残存す  
るのは、その順応の場を最も適切なところに求めたものと  
いえよう。

### 三、結語にかえて

わが上古の天神族・国神族の研究の比較事項として双分  
組織を簡単に考察したが、まだ結論を語る論程には達して  
いない。いわば準備段階を終えたに過ぎないが、既に本誌  
掲載の許された頁数が尽きたので一先ず擱筆しなければな  
らない。けれども上述するところで、私が企図する天神・  
国神両系のウジ分類を、双分組織との比較において考察し  
ようとする基盤とその方向はほぼ示し得たと思う。今若し  
そうした方向において考察を試みるならば、次のような順  
序によつて論証を進め度い。双分組織の残存形態は、既に  
その機能を失つてた氏族を天地・上下などに二分分類す  
るといふ形式だけを止めるという一般傾向からすれば、  
『新撰姓氏録』に見られる天神系地祇系の分類概念はまさ  
しくそれに該当するものである。次に今一つの残存は宗教  
的側面に見られるのが普通であるが、この点わが神社に関

する天神地祇の分類及び後代の宮座(特に同族座衆)の構造にまで絲をひく問題として考証されねばならない。次にこれらの残存形態を実証的な手掛りとして、嘗て天神族・国神族の二集団が實際的機能を持つて居た一層古い時代の様相を神話伝説などの僅かな史料を通して探求すべきであり、それについて先ず神祇令の天神地祇に配当されている神社とそれに関係をもつウジ族の歴史を考証して行き度い。なおいえば神話伝説が天神・国神について、特に社会的祭政的機能に関連した事項をどれだけ、またどのよう語っているか、中でも結婚伝説の内にこれに関係するものが見られるか、などの諸点が考察の焦点となつて来るであらう。

以上のことは双分組織の問題にとどまらず、わが上代社会における氏族制の問題とも不可分な関係にあるが故に、おのずから研究分野は拡大されて行く。これらの諸点については、いずれ稿を改めて此正を賜り度い。

— 昭和三十年八月 —

- ① 双分組織を詳述して学界の注意を促したのは、Lewis H. Morgan の名著 “Ancient Society,” New York, 1878. の中

で彼は Iroquois の諸部族に見られるこの組織を報告し、かつそれを古代ギリシヤのそれと比較した。最初 Morgan はそれを “phratry” と呼んだ。古代アゼンヌに於いて部族 (*tribe*) の政治的な下位区分を *phratris* と呼び、本来的には血縁がその成員を決定した。この *phratris* からイロクオイのそれに英語 *phratry* を当用したのである。が今日学界では *dual organization* という言葉が一般に使用され、またその兩分された集団を *moiety* —— 仏語 *moitié* = half —— と呼んでいる。これらの術語の邦訳は一定してゐないものがあるが、私は次の訳語を使用する。

tribe (部族) / phratry (胞族) / moiety (半族)。なお *phratry* は三個以上の区分集団に、*moiety* は二分の場合に使用する。因みに、Morgan の “Ancient Society” の訳者荒畑寒村氏は、*phratry* を部族、*tribe* を種族と邦訳されていることを附言して置く。

- ② Iroquois の氏族及び双分組織を最も詳しく報告してゐるのは、Morgan, “Ancient Society,” の第二章及び第三章である。本稿で右の外に C. Wissler, “An Introduction to Social Anthropology,” N. Y., 1920. chap. VIII, Dual Division on Exogamy. 及び P. Radin, “Social anthropology,” N. Y. and London, 1933. chap. V, Democratic Federated Community: The Iroquois. を参照した。Iroquois は合衆国の北東からカナダの一部にかけて住居したアメリカインディアンの一種族で、狩猟と農耕を併營し、特に政治的社会的な組織に於いてデモクラチックな特色を著し

く発達させた点で有名である。その政体は六個の部族を協同聯  
盟組織によつて一國民 (nation) に結成してゐた。

- ③ Winnebago の研究は Paul Radin が著者で、自他ともに許す  
ものである。その研究 “The Autobiography of a Winnebago  
Indian” (University of California Publication in American  
Archaeology and Ethnology, Vol. XVI, No. 7, April, 1920.) は全  
く新しい研究報告として学界の注意をひいた。論著は、後に  
“Crashing Thunder.” N. Y. and London, 1926. という標題の  
単行本として増補出版された。一現地人の自叙伝を通じて氏族  
及び二分組織の機能を興味深く窺ふ得るが、本稿では同氏の左  
の諸論著を主として参考した。

“The Social organization of the Winnebago Indians, an Inter-  
pretation” (Anthropological Series, Canada Department of Mines,  
Geological Survey, Ottawa, 1915.)

“Social Anthropology,” N. Y. and London, 1933, Chap. VI,  
Organized Democratic Community: the Winnebago.

“The Story of the American Indian,” Garden City N. Y.,  
1937. Prologue.

- ④ インカ帝国 Inca Empire は南米ペルーを中心とし、その版  
図は北はエクアドルから南はチリーのモール河に及び、東はア  
ンドレス山、西は太平洋岸に及んだ原住民の国で、インカ即ち皇  
帝は「日の御子」として太陽崇儀を著しく発達させた。十三世紀  
の中葉、始祖インコ・カパク (Manco Capac) が建国して、一五  
三三年スペイン軍によつて征服された。インカ時代に関する史

料はスペイン人の記録によつて残され、今日ではその註解書や  
研究も多い。特にインカの遺跡遺物の考古学的美術的方面の研  
究は甚だ多いが、その社会構造に関する研究は充分でない。オ  
リジナルな史料を利用し得ない私は、二分組織に関する史料と  
研究は唯一的に左記の論著に依つた。

Ronald L. Olson; “Clan and Moiety in Native America,”  
University of California Publications in American Archaeology  
and Ethnology, Vol. 33, No 4, Berkeley, 1933.

右の内特は The Northern Andean area, 及び The Inca Empire.  
の二項 (pp. 372—381.) を主として参考した。

- ⑤ Robert H. Lowie; “Primitive Society,” New York, 1920  
Chap. VI, The Sib.

⑥ Same Author; “Social Organization,” New York, 1919. Part  
III, 11 Unilateral Descent Groups.

- ⑦ 前掲④のホルソンの研究報告。因みにカリホルニア大学人類  
学研究室ではローウィヤホルソンをはじめ二分組織に関心を持  
つ生徒が多く、例えは次の研究などもその内に加えることが出  
来る。

“Miwok Moieties,” University of California Publications in  
American Archaeology and Ethnology, Vol. 12, No. 4.

“Clans and Moieties in Southern California,” the Same  
Publication, Vol. 14, No. 2.

## The Dual Organization of the Tribal System of Ancient Japan

By

Shoei Mishina

The Amatsu-kami (天ツ神) and the Kunitsu-kami (国ツ神), the two different geneologies of gods of ancient Japan, were not only the divine categories but also the principle of division of the ancient social structure. Such a classification belongs to the type of so-called dual organization. It prevailed in the ancient society as a blood relation and occupied a mid-way position between the clan and the tribe. It had many functions from the matrimonial to the politico-military regulation. The religious rites were also one of their functions. But the social development caused many deviations of the categories which at last was curtailed before the social and political forces of the succeeding generations.

### Kittan Clanship and Totemism

By

Matuo Otagi

Among the Kittans there were two communal arrangements which divided the people. Such were the Yeh-liis (耶律) and the Shên-mis (審密), but their origins and their meanings were already unknown to the people at large only remaining their slightest traces in the matrimonial customs and the religious rituals and pastimes of the community.

Though not so conspicuous in the reign of Liao (遼) such customs were the remains of the old communal arrangements which once made themselves felt as the essential institutions of the tribe. The two social systems which divided the tribe into the Yeh-lii and the Shên-mi phratries are to be considered, in my view, as the results of phratry totemism. In this article an attempt was made to explain the essential phenomenon of totemism and I suggested in the folkloric tradition of the tribe the origins of the above-named phratries. In the process of my argument,